

八百長

八百長

新橋遊吉

文藝春秋

八百長

昭和四一年四月三〇日 第一刷

定価三六〇円

著者 新橋遊吉

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

著者略歴

本名 馬庭野 昭和8年3月 大阪生れ。昭和27年4月、私立初芝高等学校卒業後、七年間療養生活を送る。法貴製作所勤務を経て現在に至る。『讀岐文学』『行人』同人。

*万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

©1966

YUKICHI SHINBASHI

PRINTED IN JAPAN

逃 走 者	内 輪 外 輪	幻 の 勝 利	八 百 長	目 次
-------------	------------------	------------------	-------------	--------

173	119	79	5
-----	-----	----	---

装
幀

土
井

榮

八百長

八百長

バックストレッチを第三コーナーに向い馬群は流れるように進んでいた。先頭を駆けるブル―モアから五番手の位置に、ミスコロラドと並んで戸上は、ヤシマライトを馬なりに駆けさせていた。各馬の間隔は約二馬身である。彼の取ったこの位置は、追込みの脚質を持つヤシマライトには最も適していると云えた。おそらく馬主席で双眼鏡を片時も手放さず、自分の馬の走りぶりだけを見ている馬主の剛田も、調教師の仙波も、それにヤシマライトに賭金を投じて、その勝利を信じ且つ願っている多くの観客も、皆それぞれに好位置へ付けて呉れたとの思いで、刹那的とは云え期待と軽い安堵感が、胸をみなぎらせている筈だった。

戸上はこのレースでは、勝つべき為に最善の努力を尽していると云う事を、演出してみせる必要があった。彼のすぐ前には今日のライバルと目されるマサヒカリが、ベテラン浅田騎手のいつもながらの巧みな手綱捌きに、軽快な脚どりを見せている。緑と赤が菱山形の模様になっ

た、派手な騎手服につつまれている浅田の、憎らしいようないかり肩の背中を見つめつつ、戸上は最終的な作戦を頭脳に走らせた。

もう一ハロン（二百米）足らずで第三コーナーにかかる。脚質自在と云ってもどちらかと云えば、多分に先行型であるマサヒカリは、第三コーナーの手前から仕掛けて行くのに決っている。浅田にしてみればブルーモアは単なる一介の逃げ馬ではなく、逃げてたるまぬ、その粘っこい脚力はいかにか出来ない、そこへ加えて背後にびったり付けてくるヤシマライトの追込みの威力を計算に入れると、どう考えてみても現在走っている位置は、感心出来たものではない筈である。従って第三コーナーでの仕掛けは必至で、これによってブルーモアの直後に付け、当面の敵であるヤシマライトを出来るだけ離して、第四コーナーからホームストレッチに向い追上げるべく、最良の態勢に持ち込むに違いない。そこで戸上はマサヒカリの仕掛けと同時に、ヤシマライトを追い出し、そして脚力のつづく限り、マサヒカリと烈しく競り合^あって、このライバルを競り潰してしまふべきレース展開を、一瞬のうちに描きだしたのである。

戸上はヤシマライトを勝利に導いてはならなかった。それと共にマサヒカリにも勝たせる事を許されていなかった。この両馬が勝鞍を上げ得ない場合、余程の狂いのない限り、ブルーモアの逃げ切り勝ちが明らかであった。そしてヤシマライトが二着入線と云うレース結果を望ま

れていた。戸上はこの阪神盃と云う四、五歳馬の一流どころが争う重賞競走で、ある人物と組んで、はなはだ高等な技術を要する八百長レースを企てていた。勿論、彼だけで演じる、一人八百長なのである。

併走していたミスコロラドが、急遽スパートするヤシマライトを抜き、更にマサヒカリを抜いて三番手から二番手へとあがって行った。ミスコロラドの騎乗者である西地は、もともと意表をついたレース振りをするのが得意な男で、良く云えば大胆不敵、悪く云えば山勘だと定評があった。それだけにまともに作戦がつぼにはまった時は、実に鮮かな、見るものをしてうならせる派手な勝ちかたをした。その反面、勝てる見込みの薄いレースには、勝敗を度外視したイチかバチかの走法で、各馬のペースをくずして混乱させ、自らも壊滅するような事をあえてやるので、西地の出るレースは荒れる気配が多く、他の騎手にとっては、いささか厭な存在なのである。

長 百 八

牝馬ひんばながらもしばしば鋭い追込みを見せるミスコロラドを、第三コーナーから追上げるように仕掛けて行くのは、あまりにも無謀なレース振りではなからうか。このまま先行するブルーモアを躡かむし、尚且つ他馬の追込みをしりぞけてゴールインするなど云う事は、およそ不可能

な話であった。今日の場合ミスコロラドの取るべき、常識的なレース展開なら、当然ヤシマライトに付けて走り、そして直線の差脚を期待すべきであろう。さすれば勝つのは無理だとしても、レースのあや次第では、二着あるいは三着に食い込めぬ事もないのである。西地がそれやらないのは、既に勝算なしと判断して、勝負を投げたからであろうか、それとも西地独得の勘のひらめきから起った所作なのであろうか。いずれにせよこの西地の取った戦法によって、果してマサヒカリがどう出るか、戸上はいつでも追出せるべく態勢を整えると、浅田の出方を待った。先頭馬は第三コーナーを廻っていた。だが浅田は意外と落着いていて、マサヒカリを追う気配を一向に見せないのである。前方へ視線をやると、ミスコロラドが烈しくブルーモアに迫っている。ペースがぐんと早くなり出した。戸上は少し慌てた。レースのよみを誤ったと思った。そう思った瞬間反射的に手綱をゆるめて内へはいり、そしてマサヒカリと並んでいた。これで両馬は競り合いの形になった。この処置で当然浅田が否応なく、仕掛けて出るものと思つた。他馬に競りかけられるのを常々浅田は嫌うからである。だがこれも、物の見事に肩すかしを食わされた。

浅田は反対にマサヒカリをややさげて、今度は逆にヤシマライトを完全にマークした恰好になつてしまった。トップのブルーモアは懸命に追いつがるミスコロラドを、半馬身押えた儘、

早くも第四コーナーにかかろうとしていた。第四コーナーこそ勝負どころであり、ここを如何に有利に廻るか否かで、勝敗に大きく影響するのである。

ヤシマライトとブルーモアとの差は、かなり開きすぎたようである。各コーナーには競走監視塔があり、そこには競走中の不正行為を発見する為の、監視員が目を光らせており、迂濶なレース振りは出来なかった。

戸上は一気にヤシマライトを追上げて、またたく間に二頭の先行馬を抜いてしまっていた。

二頭目を抜く時には、第四コーナーのカーブに來ている。戸上はちらりとうしろへ目をやった。そこには食いつくようにマサヒカリが付けていた。チャンス到来である。戸上はふくれた恰好になり、わざと大きく外を廻って直線へ向った。外側に付いていたマサヒカリは、どうするすべもなく、同じように外へふくれ、振りまわされてしまっていた。浅田が躍起となって馬を立て直し、追込みにかかった時には、ヤシマライトに五馬身余り遅れていた。ゴール迄三百米弱である。無理追いしたミスコロラドは力尽きたのか、戸上の馬はこれを軽く躲していた。快調に逃げるブルーモアを見ながら戸上は北叟笑んだ。そして八百長成就の酔ったような感覚で、ヤシマライトに鞭を入れていた。ブルーモアとヤシマライトの間隔は十馬身ばかりある。どう追込んでみたところで、届く可能性はまず無しと判断したからでもあるが、それと今ひとつに

は二万余の観客の前で、どれくらい必死の追込みをかけたかを、演技して見せる必要があったのである。

が、戸上は鞭を使い出してから、忽ち血の気が引くのを覚えた。ヤシマライトはかつて彼の騎手生活に於いての経験に、あまりないような物凄い差脚を発揮して、ブルーモアを追込んで行ったからである。ブルーモアの高原騎手も憑かれた如くに叩き出している。ゴール前五十米の地点でヤシマライトは、ブルーモアを殆んど並ぶところ迄追い詰めてしまった。観客席の正面である。四方からの眼が、この二頭の激しい攻防に集中されている。いや、二頭の激戦と云うより、類まれなヤシマライトの追込みの素晴らしさに、完全に魅了されていたと云う方が正しかった。事ここに至っては、もうどうする事も出来なかった。戸上は蒼白になった顔を意識しながら、鞭を入れつつづけた儘ゴールを通過していた。ゴールでは半馬身程ブルーモアを抜き去っていた。

大観衆のどよめきを耳にしながら戸上は、情力のついたまま走り続けるヤシマライトの手綱を、締めようとせず、第二コーナーの地点迄走っていた。

その夜戸上は、馬主の剛田主宰の阪神盃勝利祝賀会に、ほんの申訳程度に出席し、剛田のい

つものに似合わぬ機嫌の良さに、いささか辟易^{へきえき}して、早々に急用がある旨をのべて引上げると、その足で宝塚市内にある、ひさご亭と云う料理旅館の一室に於いて、紀宮恭子と待ち合わせるべく向った。

戸上の所属する仙波厩舎^{きんぱうけいさ}は、現在数人の馬主より、サラブレッド、アラブを混えて十六頭の競走馬の管理を依頼されており、まず中堅級的な存在の厩舎であった。そのうち七割強が剛田の持馬で、云わば仙波厩舎のお得意様なのである。もし剛田が、何かの事情で調教師の仙波と折合悪くして、自己の持馬の全部を他の厩舎に移動したりすると、途端に仙波厩舎全体は生活権を少なからず脅やかされる事になるのである。これは大袈裟な表現かも知れないが、或る程度本当なのだ。第一に厩舎側としては、毎月受け取る十一頭分の預託料金が、まったく入らない事になり、その上管理している馬が、レースに勝って賞金を獲得した場合の進上金もなくなるのである。勿論仙波厩舎に所属している戸上以下、二名の騎手達も騎乗馬がうんと少なくなるから、戸上の様に騎手としての技術がすぐれ、他の厩舎からもさいさい頼まれて騎乗する者とはとも角、他の二名の騎乗手当、進上金等の減少は、免れない事実であり、それは又、十一頭の馬に付きそっている馬丁らにしても同じ事が云えた。これらの事を意識してではないであらうが、剛田の仙波厩舎の関係人一同に対する態度は、まことに傍若無人であり、それは昔の大

名が家来に接するようなものであった。戸上などでも、きわどい勝負で敗けた時など、厩舎へやって来た剛田に、反古紙と化した不的中馬券の束を、幾度足元へ投げつけられた事であろうか。道で出会って鄭重な挨拶をして、ふんぞり返っているくらいのもので礼を返すなどと言うような所は、薬にしろとも見られないのである。そのくせ、知らぬ顔の半兵衛をきめこんで、黙って通り過ぎようものなら、すぐ調教師の仙波が怒鳴りつけられる役を買うのである。曰く、お前の所の小僧は馬主と出会っても頭ひとつ下がない無礼者で、生意気な奴だと罵り、誰のお蔭で飯が食えているのだと云う意味の言葉を、臆面もなく言い放つのである。それでも仙波はむかつく胸を無理にも押え、何も言葉を返さず、ひたすら詫びて御機嫌を取り結ぶしか手がないのだ。レースの結果について、口喧しいのは他に例がない程である。

剛田の持馬には二人の弟弟子が乗る事もあるが、戸上は仙波厩舎の主戦騎手だから、おおむね彼が騎乗する。だが常に勝負に勝てる馬などと云うものは、そうざらに出現するものではない。競走馬の生涯、つまり現役として活躍出来る、その競走期間（三歳から七歳迄）に於いて、まず十勝すれば上出来の方で、一流馬にランクされる。大半の馬は五、六度も勝鞍をあげ得るならば、良い成績を残したとして満足しなければならぬ。いくたび走ってみても只の一度すら勝てずに、競走界を去る馬も例が少なくないのである。それなのに剛田と云う、わからずや